

虹

に

ここだから作れる服を



高松さんがしけ絹を用いて作ったドレス

①74 世界のブランドを渡り歩き富山へ

フィッティングの主演は客だ。どんなに華やかなドレスや、風格のあるジャケットを作ろうとも、アトリエでの高松太一郎さん(40)は黒いシャツを身に着ける。ひたすら黒子に徹するのだ。

富山市内に構えたガラス張りのアトリエにはイブニングドレスが並ぶ。「服を作る上で大事にしていることの1つは重力」。トルソー(胴体だけの像)にかけた布を動かし、しなやかに流れる瞬間を探す。光沢を帯びた布自体が求める形を模索する。窓から吹き込んだ風でドレスの裾が優雅に揺れる。

高松さんはパリで王族や著名サッカー選手のスーツを仕立ててきた。しかし、帰国後の拠点には、出身地の福岡でもなく、大都会でもなく、富山を選んだ。「ここだからこそ作れるものがあると思うんです」

たとえば城端伝統のしけ絹でドレスを作る。「いろんな方向から光が入る。この透明感は生命そのもの」とほれ込む。しけ絹を生産する松井機業の松井紀子さん(38)は「生地が透けるから服には向かないと敬遠されてきた。でも高松さんは本気で向き合い、しけ絹の短所を長所に変えた」と話す。

◇

10代の頃は洋服に興味はなかった。母親が買ってきたものでも素直に着る。体を動かすのが好きで、やんちゃだった。休日、中学校の屋上で友達と悪ふざけをしていた。足を踏み外して、3階建ての屋上から落ちてしまった。死んでもおかしくない状況だったが、命は救われた。しかし、全身を激しく打った。医者からは、成長期真っ盛りに大けがをしたことで身長が伸びないかもしれないし、筋肉量や骨密度に影響するかもしれないと説明を受けた。絶望した。

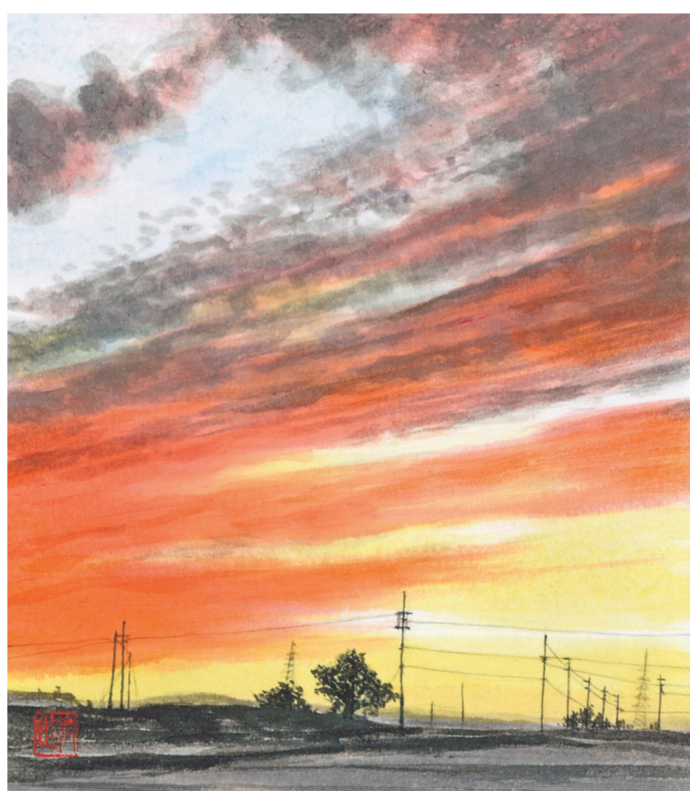
病院の図書コーナーは医療関係の本が充実していた。元通りの体になりたいと解剖学や運動生理学の本を読みあさった。「学校の勉強より面白い」と思った。

幸い、大きな障害は残らなかった。代わりに「一度死にそうになったんだから」と好きなことを突き詰めなくなった。高校卒業後、体育大でバスケットボールに打ち込んだ。しかし、大きなけがをした。部活のために入った大学で運動ができなければ意味がない。かつての入院中の「勉強」で人体構造に詳しくなり、デッサンが好きだった。運動がダメでも絵がある。家族に薦められ、東京の美大に入り直した。

教室で座っているより、自分で何かをつかみ取りたいという好奇心は相変わらずだった。画家でもある教員の「美術をやるならヨーロッパくらい行け」という言葉を真に受けた。入学後間もなく休学してイタリアで遊学した。自転車であちこちを回った。

今も忘れられない光景がある。老人がチェスをしながら幼児に話し掛けていた。「この色のジャケットならパンツはこう合わせろ」。高松さんは一連のやりとりに耳を傾けて、「子供相手にすごいな」と思った。衣服が文化として根付いているのだ。

帰国後、大学の友人に誘われ、学園祭でファッションショーをやることになった。デザイナーという大役を任された。お遊びではあったが、「どうせなら」と洋裁学校にも通った。マティスの絵画に着想を得た



「黄色の空」 広田 都世

ドレスを作った。自分が将来勤めることになるファッションブランドのアートブックも参考にした。「こんなきれいなシルエットがあるのか」と心を奪われた。

見よう見まねで作ったドレスをまとった友人たちがランウェイを歩いた。満足のものではなかったが、誇らしくもあった。他の大学の演劇部から衣装を担当してほしいという依頼があった。自分の作った服が人を動かしたのだ。自分がやるべきことは絵画ではなく、服飾だとひらめいた。

学ぶなら本場だ。衝動は国境をものともしない。交換留学制度を使ってイギリスに渡った。その大学にはほとんど通わず、ロンドンの紳士服ブランドに見習いとして入った。「背広」の語源になったサヴィル・ロウという通りがあった。大学からは「学校に来ないのか」という電話が何度もあった。

しかし、学校では学べないことがあるのだ。

◇

素人同然の日本人にイギリスのテーラーたちは冷たかった。オーダーメイドのスーツは徹底した分業制から生まれる。最初は芯材を作る工程を担当したが、誰も手取り足取り教えてくれない。ほかの職人の作業を盗み見るしかなかった。

地下の仕事場は殺伐としていた。「できないなら帰れ」とののしられる。「日本人がなぜ洋服を作るのか」とも言われた。人種差別とも受け止められる発言だった。しかし、高松さんは前向きだった。「必要な言葉だった。なぜ僕が服を仕事にするのか。向き合わないといけない問題だった」。自分だから作れるものを作ろうと決めた。

熟練の職人たちの作業をうかがいなが

ら、ひたすらまねた。彼らが仕上げたものに触れることは禁じられていたが、観察することは許されていた。上達しても褒められないが、ポケット作り、アイロンがけと仕事はどんどんステップアップした。留学中の2年間では全ての工程を体験できなかったが、帰国後は日本のテーラーに学んだ。ロンドンの経験もあり、1人で縫い上げる「丸縫い」ができるようになった。

美大で「服に真剣なやつがいる」と評判になった。国内の新興ブランドから声がかかった。今度は女性のドレスを担当することになった。意図せずしてメンズにもレディースにも精通する貴重な存在になった。

名だたる世界のブランドからお呼びがかかった。ドルチェ&ガッバーナでは、直接顧客と接するフィッティングや縫製を担当させてもらった。学生時代の遊学で目にし

た光景のような、幼い頃から「服の英才教育」を受けている人たちが厳しい注文を突きつけてくる。それがうれしかった。要望に応じることで、成長につながると思った。

クリスチャン・ディオールでは、女性のスーツのオートクチュールを担当した。長年ブランドをひいきにする顧客が高松さんを買ってくれた。ポケットの位置の調整のような、ちょっとした工夫の積み重ねを評価してくれた。洋服の達人のような顧客を満足させて自信を持った。ブランドに頼らず、彼女にジャケットを仕立てたいと思った。

◇

コロナ禍で自宅待機になったことをきっかけに日本に戻った。独立の契機と考えた。それまで帰国するたびに仕事や旅行で日本中を巡っていた。ずっとパリやロンドンのようなファッション最先端の街にいた。今更東京に行かなくてもいい。地元の九州は知人が多く、誘惑が多い。創作に集中できなさそうだ。

富山が気に入った。しけ絹がある。それに川や用水の水がきれいだった。青空に映える立山の美しさに驚いた。大地の力を感じた。釣りや野遊びに夢中になった少年時代を思い出した。妻から「雪が大変じゃないの?」と心配されると、もっと住みたくなった。「あらがえないものの中にこそ美しさはある。それが力を与えてくれる」と考えた。ビジネスには不利かもしれないが、いいものを作れなければ売れるものもない。ただのあまのじゃくではない。

富山で追求したいものが二つある。一つはしけ絹を使ったドレスだ。そして、女性のためのジャケットやスーツを作りたい。今、女性が着るジャケットは男性ものの延長線上にある。高松さんには、それが男性社会の象徴のようにも見える。だから男性がうらやんでも着られないような女性ならではのスーツの形を模索している。「袖を通した女性が社会を動かす自信を持つ服にしたい」。来年、パリで「高松太一郎」として作った服を発表すると決めている。富山からファッションの中心地に殴り込む。

お気に入りの服を着ると気分が高まります。服が自分を守ってくれる気もします。気軽に買えるファストファッション全盛の時代ですが、特別な一着を大切に着続ける方が持続可能な未来につながるでしょう。高松さんが移り変わりの激しい大都会ではなく、自然が豊かな富山を拠点に選んだのは最先端の取り組みなのかもしれません。



「虹」第8巻 販売中

最新刊の第8巻「虹 誰もいないから両手を広げた」は、北日本新聞連載の141~160回目までの20話分を取っています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時~午後5時)。

心があたたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は11月1日(水)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局